

1時間ドラマ用脚本

『新郎はちよつと寄り道』

作 #13

## 登場人物

知道(男・29) 新郎

明穂(女・26) 新婦

政則(男・53) 新婦の父

諸岡(女・38) 結婚式場のヘアメイク係

サトミ(女・6) 知道が出会う少女

都築(男・56) 刑事

林(男・27) 刑事

松本(男・30) 制服警官

田崎妻(女・39) 警察署に来る中年女

田崎夫(男・41) 警察署に来る中年男

別府(女・25) 会社員

○ 昭和理科大学・構内

知道「あ、あれ？」

と、バランスを崩して、

知道「痛てっ！」

フェンスの上から転落した知道（29）。

ボサボサの長髪に眼鏡の気弱そうな男。

携帯電話で話そうとして、破いてしまった上着の袖に気づき、

知道「ああっ！」

明穂（電話）「何？」

知道「あ、ううん。何でもない」

知道、広々とした大学構内を歩き出す。

明穂（電話）「それで、遅くなるって、どのくらいなの？」

知道「ああ、いや、多分、時間ギリギリまでには着けると思うんだけど。今、

昭和理科大学の中通って近道させてもらってるから——」

と、白衣の学生たちにごぶつかって、

知道「あっ！（ペコペコと頭を下げる）すみません、すみません、すみませ

ん」

学生たち、あわてた様子で走って行く。

明穂（電話）「ちよっと、何？ こんな日にまで、あまり人に迷惑かけないでよ」

知道「うん、分かってる」

明穂（電話）「どうせまた、ゆうべ遅くまでビデオ見てたんでしょ？ あの『プ

リンセス・エミー』のDVD。あれ、もう捨てるって約束したのに」

知道「（口ごもる）ああ、うん……でも……」

○ ある建物・ある一室

ドアから、携帯電話で話しながら明穂（女・26）が入って来て、

明穂「でも、何？」

大きなバッグを持った父・政則（53）も入って来る。

明穂は普段着だが、政則は礼装のモーニング姿。

明穂「とにかく急いで早く来てね。主役が遅刻したんじや、しょうがないんだから。あっ、それから、その遅くなるってこと、一応そっちのお父さんとお母さんにも連絡しといてよ。お父さんたち、先に着いちちゃったら——」

電話から、ガリガリツと音が聞こえて、

知道(電話)「ああっ!!」

明穂「(ため息) 今度は何?」

電話、切れている。

そこは、さほど広くない部屋。

鏡台が置かれ、ウェディングドレスが掛かった衣装スタンドがある。

結婚式場の新婦メイク室である。

白髪頭の政則、あきれ顔で、

政則「あの男、今日まで遅刻か」

明穂「(訂正して) 『知道さん』」

政則「今言ってた『プリンセス・エミー』って、お前が小さい時に好きだったアニメだろ。あの、短いスカートの女の子が悪者と戦うやつ。あいつ、アニメ好きって、あんなのも見てるのか?」

明穂『も』って言わないで。しつこい。そういう話、もう終わったよね?」  
政則「でもさ、仮にも一人娘をあんなへなちよこロリコンオタクにくれてやるんだぞ。少しは、そんな父親の身にも——」

明穂「なってみない」

ドアにノックの音。

明穂「はい」

諸岡「失礼します」

ヘアメイクの道具入れを持った女性・諸岡(38)が入ってくる。

明穂「(笑って) あっ、おはようございます。——お父さん、今日、メイクや衣装みてくれる諸岡さん」

諸岡「(政則に) 諸岡です。本日はおめでとうございます」

政則「あ、はい。どうも」

諸岡、鏡台で準備を始める。

ぼんやり立っている政則に、

明穂「何?」

政則「え?」

明穂「お父さん、もういいから出ててよ」

政則「ああ、うん。……じゃあ、これ。母さんの箱」

と、政則、バッグから出したものを明穂に渡す。

明穂「うん」

それは、古びた贈答用菓子の箱。  
紐で封がされ、「明穂へ」と書かれた紙が貼られている。  
明穂、手にした箱を見つめて、

明穂「……」

政則「なあ、明穂。やっぱりあの男——」

明穂『「知道さん」』

明穂、政則を廊下に出してドアを閉める。

### ○ メインタイトル

『新郎はちよつと寄り道』

### ○ 昭和理科大学・正門前

にぎやかな道路に面した正門。  
大学構内から知道が出て来る。

知道「痛ててて……」

頭を押さえている知道、携帯電話を開く。

待受画面には、遊園地で笑う明穂の画像。

電話帳で「お母さん」を検索し、発信しようとするが、

知道「(気づいて) 圏外……?」

携帯電話をあちこちに向けてみた知道、顔を上げて、

知道「!?!」

周囲を見回し、あ然とする。

知道「……」

近くを歩く主婦ふうの女が、携帯電話で通話中である。

知道、おずおずと近づいて、

知道「あの、すみません……。すみません……」

主婦「え?」

知道「あの、ちよつとお聞きしたいんですが、いいですか? あの、こころ  
て……」

と、知道、何かに目を留めて、

知道「(息を飲む)!!」

主婦「何ですか?」

知道「……」

主婦「何なの、あんた。(電話に) ああ、ごめん。今ね、何か変な男の人がいて……」

去って行く主婦。

知道が見ているのは、歩道を一人で歩いて来る少女(6)。

ピンクのジャンパーを着て、不安そうに周囲を見回している。

知道「目を見開いて」……」

少女、知道のすぐ前を通過。

呆然と見送っていた知道、ハッとする。

少女のジャンパーの背中には、アニメの絵のプリント。

「プリンセス・エミー」のロゴが入った、短いスカート姿の三人の少女戦士の絵である。

知道の口元に、ゆっくりと笑みが浮かぶ。

## ○ 川科警察署・前の道路

泣きながら来たジャンパーの少女、前方の建物を見て足を止める。

駐車場にパトカーの並ぶ警察署である。

少女、その玄関に向かおうとするが、

知道「どうしたの？」

見ると、すぐ近くに知道がいる。

知道、少女の前にしゃがんで、

知道「ねえ、どうしたの、一人ぼっちで？ 何で泣いてるの？」

少女「泣いてない」

知道「そう？ あの、ええと……君の名前は……確か……」

少女「サトミ」

知道「(大きくうなずいて) ああ、うん、そうだ。やっぱりサトミさんだ。サトミさんは迷子になっちゃったの？」

少女・サトミ、首を横に振って、

サトミ「ちがう。お兄さん、誰？ 前に会ったことある？」

知道「うん、何ていうか……。まだ会ってはいないんだけど、知らない人とかじゃないんだ。お兄さん、サトミさんのことはよく知ってる。だから全然心配しなくていいんだよ」

サトミ「ふうん……。わたしね、今、病院に戻ると」

知道「病院？」

サトミ「川科中央病院。お父さんとお母さんが待ってる」

知道「確かめるように」じゃあ、その……病院から一人だけで出て来て、帰る道が分からなくなって……」

サトミ、警察署へと歩き出して、

サトミ「お巡りさんに道きく」

知道「あつ、ちよ、ちよつと待って！」

知道、あわててサトミを引き止める。

知道「じゃあそうだ、こうしよう。僕がサトミさんのこと、お父さんとお母さんがいる病院まで連れて行ってあげる」

×

×

警察署の玄関。

立ち番の警官（男）が、知道とサトミに目を留める。

離れていて声は聞こえないが、げんな顔のサトミに、知道が何か言い聞かせているようである。

警官「……？」

×

×

サトミ、パツと嬉しそうな顔になって、

サトミ「えつ、本当？ お兄さんもプリンセス・エミー好きなの？」

知道「うん」

サトミ「えー、すごい！ ほら、これ見て！」

と、ジャンパーの背中中の絵を見せる。

知道「笑って」うん。お兄さん、マンガもテレビも映画も全部見たよ。ゆうべなんか遅くまでDVD見てて、今朝は寝坊しちゃった。サトミさんは、サータムプリンセス三人の中では誰が一番好きなの？」

サトミ「ええとね、服が一番かわいいのはジェニーなんだけど、技とかはやっぱりエミーの方が……」

×

×

警察署の玄関。

立ち番の警官が不審そうに見ていると、知道がサトミの手を引いて歩き出す。

警官、無線に、

警官「男、女の子を連れて歩き出しました。男の年齢三〇歳くらい、身長約一七〇センチ……」

警官の視線に気づいた知道、顔を伏せる。

道路の脇には「川科中央病院 この先300メートル」の看板。しかし、そこに書かれた矢印は、知道とサトミが向かう方向とは逆を示している。

## ○ 郊外の道路

路線バスが走る。

## ○ バスの中

並んで座っている知道とサトミ。

知道は、落ち着かない様子で窓の外に視線を走らせている。

サトミが首をかしげて、

サトミ「病院、こんなに遠かったかなあ？ もっと近かったと思うけど……」

知道「そんなことないって。こっち。もうちよつとで着くから」

サトミ「そう？」

近くにいた男が、読んでいた新聞を置いてバスを降りて行く。

ハツとした知道、新聞を取って見て、

知道「……!!」

紙面には「女兒3人行方不明、誘拐か」の見出し。

知道「(がく然)……」

サトミ「これ？」

知道「えっ？」

サトミ、新聞の日付を指している。

サトミ「これでしょ？ 『二〇一一年一月一日』。一が六つも並ぶなんて、

すごいよね。お兄さん、今、この日にち見てびっくりしたんでしょ？」

知道「(動揺を隠して) ああ、うん、そうなんだ。この日にちね。二〇一一年

……」

サトミ「お兄さん、かわいい」

知道「えっ？」

サトミ「お兄さんって、大人だけど大人じゃないみたい。ボセイホンノウクす

ぐる」

知道「母性本能……？」

サトミ「うん、くすぐる！」

知道「え、ええと……」

困った顔だが、まんざらでもない様子の知道。

サトミ、知道を嬉しそうに見ている。

### ○ 廃工場・備品倉庫の前

朽ちかけたドアに、不自然に新しい南京錠が掛けられている。ボールが差し込まれ、南京錠を壊す。

### ○ 同・備品倉庫

ドアが開き、南京錠を壊した二人の刑事・都築（男・56）と林（男・27）が入って来る。

窓がなく、空の棚だけが並ぶ暗い室内。

二人、懐中電灯をつける。

部屋の隅に積まれた数組の新しい布団。

ほこりの溜まった床には、途切れ途切れに小さな靴の跡がついている。

林、それを数えて、

林 「子供が三人……ですよね？」

都築 「それに大人が一人、男だ」

都築、林が見落とした大きな靴跡を示す。

林 「あつ、見て下さい。これ……」

棚にコンビニ食品の食べカスが散らばっている。

都築 「包装のラベルを見て」 製造日、一昨日か」

林 「もう間違いありませんよね？ 三人の女の子、ただの行方不明じゃなくて誘拐されたんです。犯人に、ここに監禁されていた……」

都築 「うなずく」

都築の携帯電話が鳴る。

都築 「(出て) はい」

松本（電話）「松本です。都築課長、今、正面の道を、不審な男がこちらに向か  
って来るんですが」

都築 「何？」

### ○ 同・表

建物の陰から、制服警官・松本（男・30）が顔だけを出して、  
松本「(携帯電話に) 長髪に眼鏡のオタクふう。五、六歳の女の子と一緒に――」

正面の人けのない道を、知道とサトミがこちらへと歩いて来る。

松本「男の特徴、先ほど本署の前にはいたという不審者と一致します」

長く放置され、荒れ果てている廃工場。

やって来た知道とサトミ、その広い敷地の入口で足を止める。

サトミ「ほら、やっぱり病院じゃない」

知道「うーん、変だなあ。絶対にここのはずなただけど……」

知道、しきりに首をかしげる。

知道「じゃあ、お兄さん、ちよっと（建物を）見てくるから、サトミさんは

ここで待っていて」

サトミ「えっ、やだ、怖い！」

知道「一緒に行く？」

サトミ「（うなずく）」

知道「よし、じゃあ探検だ。この建物、もしかしたらパープルデビルの秘密

基地かもしれないよ」

サトミ「えーっ？」

サトミ、知道にしがみつく。

建物の中に入ろうとする二人。

しかし知道、ハツとする。

割れ残った窓ガラスに、物陰に隠れた松本が映っている。

知道「（小声）……サトミさん、走れる？」

サトミ「え？」

知道「ここ、やっぱり悪者の秘密基地だったんだ。……いくよ、せえの！」

知道、引き返して走り出す。

松本「あっ！」

松本、追って来る。

サトミ、強く手を引っ張られて、

サトミ「お兄さん、いたい！」

振り向いた知道、足がもつれて転倒。

サトミ「お兄さん、早く！ 悪者来る！」

必死の知道、松本に土を投げつけ、立ち上がるが、

都築「どうも」

知道「！」

目の前に立っている都築と林。

松本が知道の背後をふさぐ。

都築、警察の身分証を示して、

都築「どうも、川科警察署の者です。お急ぎのところすみません。失礼ですが、こちらでは何を？」

知道、おどおどと目を伏せる。

知道「……」

都築「こちらのお子さんとの御関係は？」

知道「……」

林「おい、何で黙ってる！」

知道「ビクツとするが」……」

都築「そうですか。じゃあ何か、身元を証明できるものとか——」

と、知道、サトミに手を伸ばす松本に気づいて、

知道「意味不明の叫び」——」

知道、サトミを渡すまいと暴れるが、林に簡単に組み伏せられる。

サトミ「お兄さん！（林に）やめて！」

地面に押さえ込まれた知道に、

都築「すみませんが、ちよつと署まで御同行いただきましようかね」

林、知道に手錠を掛ける。

### ○ 結婚式場・新婦メイク室

諸岡が明穂のメイクをしている。

諸岡「お口、もう少し大きめに描いてもいいですか？」

明穂「えっ？（笑って）あ、はい。もう信じてます。全部お任せで」

諸岡「笑い返して）でも、こうして見ると明穂さん、本当にお母さんに似てますよね」

諸岡、鏡台に置かれた写真立てを示す。

写真は、明穂の母・由香理を写したもの（写っている由香理は三〇代前半）。

明穂「母は私がまだ小さい時に亡くなりました。父と二人でパン屋をやっていたんですが、心臓が悪いところが見つかって、それからはあつという間。とは言っても、私、母のことって、あまりちゃんと覚えていないんですけど……」

諸岡「じゃあ、今日はお母様もお喜びですね」

明穂「どうでしょうか」

諸岡「？」

明 穂「今日結婚する人……彼がちよつと頼りないんです。うちの父なんか『へ  
なちよこ』とか『オタク』とか言いたい放題。そういうところ、彼の  
優しさのせいだってことは分かって、私もそこが好きなんですけど、  
でも時々、私もイラっとくるようなことがあって……。父一人だから  
押し切れたけど、母も一緒だったら、結婚許してもらえなかったかも  
しれません。母、とても気の強い人だったようですし……」

諸 岡「……」

明 穂「あつ、(変な話をして)ごめんなさい。今の、聞かなかったことに」

諸 岡「はい。でも言いませんよね、今どき『オタク』って」

明 穂「(笑う)」

明 穂、脇の机に置かれた箱(前出の、「明穂へ」と書かれた箱)  
を示して、

明 穂「あの箱、母が遺したものです。亡くなる前の日に渡されて、私の  
結婚式までは絶対に開けちゃいけないって」

諸 岡「じゃあ、中身は……」

明 穂「分かりません。二〇年来、私の人生最大の謎。あとで開ける時、式よ  
りもつと緊張するかもしれません」

明 穂の携帯電話が鳴る。

明 穂「あつ、すいません。——(電話に出て)もしもし?」

## ○ 同・ロビー

まだ人のまばらなロビー。

政 則が携帯電話に、

政 則「ああ、明穂か。どうだ、そろそろ時間過ぎたけど、そっちに何か知道  
さんから連絡ないか?」

明 穂(電話)『知道さん? 何、気味悪い』

政 則の横には、礼装の熟年夫婦(知道の両親)が恐縮して立っ  
ている。

政 則「もう、お父さんとお母さんも着いてるし、式のリハーサルもあるんだ  
ろ? まあ、まだ大丈夫だとは思うけど、そろそろ来てもらった方が  
……」

と、政 則、さり気なく知道の両親から離れて、

政 則「(声を潜めて)なあ明穂。今、テレビのニュースでやってたんだけどさ  
……」

ロビーの遠くの方には、つけっぱなしのテレビが見えている。

政則「何か、この辺で小さな女の子を続けて誘拐してた犯人が、警察に捕ま  
ったみたいだって」

明穂（電話）「え？」

政則「その犯人って、まさかあの男じゃないだろうな」

### ○ 川科警察署・外観

前出の警察署。

### ○ 同・事務室

玄関を入ってすぐの広いフロア。

仕切りなしで各課の机が並び、その手前には、利用者に対応す  
るためのカウンターがある。

カウンターの内側で、応接用ソファに座っているサトミ。

その横で、制服警官・松本が電話に、

松本「はい、ではお待ちしております。失礼します」

電話を切ると、サトミに、

松本「良かったね。お父さん、すぐ来てくれるって」

サトミ「お兄さんは？」

松本「えっ？」

サトミ「（心配）お兄さん、どこにいるの？ さっきのおじさんたち、お兄さん  
いじめてない？」

### ○ 同・取調室

バン、と机を叩いて、

林 「何言ってるんだ、このロリコン野郎！」

都築と林が、知道の取調べをしている。

都築「良くないこと、ですか……。この警察署に来ると良くないことが起こ  
る。だから、あの子を自分で病院に連れて行こうとしたし、あの廃工  
場でも我々から逃げようとしたと。——そういうことですよね？」

知道「（うなずく）」

都築「で、何ですかね、その良くないことって？」

知道「（必死で）だから、それはさっきから言ってるじゃないですか。もうす  
ぐここに悪い人が来て、それでサトミさんを無理やり連れて——」

林 「だから、それはお前がやったことだろ！」

都 築 「イトウミアちゃん七歳、サカモトサキコちゃん五歳、イシイシヨウカちゃん四歳。この三人の女の子を誘拐してあの工場に閉じ込めたの、あなたですよ？ 今、鑑識が調べてますから、すぐに証拠が出るでしょう」

知道 「……」

都 築 「女の子たち、今どこにいるんです？ 教えてもらえませんか？ あの工場からどこに連れて行ったのか」

知道 「……」

林 「おい、何とか言え！」

ドアにノックの音。

都 築 「はい」

一人の刑事が顔を覗かせて、

刑事 「課長、お電話です。本部から至急」

都 築 「分かった」

都築、部屋を出て行く。

林 「じゃあ、お前、何であそこに来た？」

知道 「はい？」

林 「お前、あの子を中央病院に連れて行こうとしたんだろう？ なら、何であの廃工場に来た？」

知道 「だからそれは、僕はあそこが病院だと思ってたけど——」

林 「ふざけんな！」

### ○ 同・事務室

玄関から、一組の中年男女が入って来て室内を見回す。

近くにいた松本が、

松 本 「どちらに御用事ですか？」

中年男 「ああ、すみません。あの、私たち……」

中年女、応接用ソファのサトミに気づき、ハツとした様子。

松 本 「それを見て）ああ、あの子の御両親ですか。お待ちしました。どうぞこちらへ」

部屋の奥で、都築が電話をしている。

都 築 「じゃあ、三人とも？」

電話の声(男) 「ああ。女の子たち、三人ともそれぞれの家に帰って来た。全員、

外傷もなく、いたって元気だということだ」

都 築「(安堵) そうですね。——いえ、先ほど御報告した例の男、今、取調べをしているんですが、何か訳の分からないことを言うばかりで……」

電話の声「で、そのことなんだがな。美坂署の方で女の子たちに聞き取りをしたんだ。そうしたら三人とも口を揃えて、犯人は若い男じゃなく、夫婦らしい中年の男女だったと言っているそうなんだが」

都 築「夫婦？」

ふと都築、応接用ソファの方を見る。

松本に案内され、サトミの前にやって来た中年男女。

しかし、サトミは中年男女を見てげんな表情。

都 築「！」

中年女、サトミに手を伸ばして——

### ○ 同・取調室

部屋の外で女の悲鳴。

林 「？」

続いて、何かが倒れる音と男たちの怒号が聞こえてくる。

林 「おい、ここにいろよ！」

あわてて部屋を出て行く林。

知道、続こうとするが、外からドアに鍵が掛けられる。

### ○ 同・事務室

ひっくり返った応接用ソファ。

その横で、先ほどの中年女(「田崎妻」・39)が、松本にカッターナイフを突き付けている。

田崎妻「(必死) あ、あなた、ピストル！」

夫の中年男(「田崎夫」・41)、動けない松本の拳銃を奪う。

近くの警官「お、おい！」

周囲にいる都築や警官たち、あせるが手出しができない。

林が走って来て、

林 「(驚き) 何ですか、これ!？」

都 築「何ですかってな……」

田崎妻、松本を突き飛ばすと、横で怯えているサトミの手を取って、

田崎妻「(優しく) ほら、行こう」

都 築「待て——」

田崎夫「来るな！」

震える田崎夫、都築たちに拳銃を向ける。

サトミ、恐怖に泣き出すこともできない。

### ○ 同・取調室

事務室の騒ぎの音が聞こえてくる。

あせる知道、ドアを叩いて、

知道「ちょっと、すみません！ 開けて下さい、刑事さん！」

返事はない。

知道、頼りない腰つきでドアを蹴り始める。

### ○ 同・事務室

じりじりと玄関に向かう田崎夫婦。

妻はサトミの手を引き、夫は拳銃を構えている。

距離を取って追う都築、林ほか警官たち。

田崎妻「(悲痛な叫び) 私たち、自首しようと思つて来たの！ あの女の子たち

三人、家まで送つて！ でも、この子(サトミ)がいたから……。こ

の子がいけないの！ この子が、こんなところにいるから！」

林 「ま、まあ、奥さん、落ち着いて——」

田崎妻「うるさいんだよ、ガキ！」

林 「(傷ついて) ……」

玄関ドアの前に来た田崎夫婦。

サトミを連れて外に出ようとするが、

サトミ「(喜び) あっ、お兄さん！」

部屋の奥、廊下からのドアのところに知道がいる。

林 「おい、お前！」

知道「(あわてて) ……」

知道、近くの裏口から建物の外に出て行く。

その隙に都築、大きな傘立てを玄関ドアの前に動かし、田崎夫

婦が外に出られないようにする。

田崎夫婦に飛び掛ろうとする警官たち。

田崎夫、天井に発砲して、

田崎夫「う、動くな！」

田崎妻「(指さして) あなた、あっち」

田崎夫婦、サトミを連れて事務室の中を戻り始める。

追おうとした都築、玄関の外に来た男に、傘立て越しに腕を掴まれる。

男「あの……」

都築「ああ、何かお手続きでしたら、今はちよつと……」

男「いえ、さつきこちらから電話をもらったんですが。これ、何か訓練ですか？ 私、あの子の……里見明穂(サトミ・アキホ)の父親なんです」

とまどい顔でサトミを指している男。

それは、まだ頭に白髪がなく、若々しい姿の政則(33)である。

## ○ 雑居ビル・ある会社の入口

社員数人の小さな会社。

社員の別府(女・25)、外の廊下に立つ知道を不審そうに見て、

別府「奥さんを助ける？ だって、その『サトミさん』って幼稚園の女の子なんですよね？ 何でああなたの奥さんなんですか？」

知道「だから、それは……。 (必死で) とにかくお願いします！ この会社でいいはずなんです！」

別府「いいはずって……」

知道、無理やり室内に入る。

別府「あつ、ちよつと！ 何するんですか！ 警察呼びますよ！」

引き止めようとする別府。

はずみで知道の眼鏡が落ち、別府に踏み潰される。

## ○ 川科警察署・屋上

五階建ての屋上。

階段室から、サトミを連れて田崎夫婦が出て来る。

追って来る都築、林ほか警官たち。

屋上の縁には、腰くらいの高さのコンクリートの囲いがある。

田崎夫婦、サトミを連れてその上に立ち、

田崎妻「来ないで！」

田崎夫に拳銃を向けられ、都築たちは近づけない。

田崎妻、手をつないだサトミに、

田崎妻「ごめんね。私たち、子供が欲しかったのにどうしてもできなくて……。

だからね、一緒に行こう」

そう言つて田崎妻、隣の建物との隙間を見下ろす。

地面は十数メートル下。

サトミ「(恐怖) やだ、行かない……」

政則「明穂！」

屋上が上がって来た政則。

サトミに駆け寄ろうとするが、警官に制止されて、

政則「(半狂乱で) 何してるんですか！ 何とかして！ あんたたち、警察だ

ろ！？」

都築「唇を噛んで」……」

困いの上の田崎妻、夫に、

田崎妻「あなた」

田崎夫「ああ」

田崎夫婦、屋上の外へと向き直る。

都築「(あせつて) 待て！」

政則「明穂！」

サトミを連れ、飛び降りようとする田崎夫婦。

その時、夫婦の正面で、隣の雑居ビルの窓が開く。

窓の中には、知道(眼鏡はなく、ボサボサの長髪は紐で縛って

いる)と会社員・別府がいる。

二人、揉み合っていて、

別府「ちょっと、やめて下さい。本当に警察呼びますって。ここ、隣は警察

署——」

窓枠に上った知道、目の前の田崎夫婦とサトミに気づく。

知道「！」

あっけに取られている田崎夫婦、都築や政則たち。

サトミ、叫ぶ。

サトミ「お兄さん、助けて！」

知道「だああっ！」

ジャンプした知道、ビルの隙間を跳び越え、田崎夫に体当たり。

拳銃が弾き飛ばされる。

屋上に落ちた知道と田崎夫、格闘になる。

田崎夫には格闘技の心得があるらしく、拳や蹴りが面白いようにヒットする。

だが知道、全く怯まずに立ち向かう。

それを都築、ぼかんと見ていたが、

都築「(ハツとして) おい、確保！」

我に返った警官たちが殺到、知道と田崎夫を取り押さえる。

都築、安堵の息をつくが、

政則「(絶叫) 明穂！」

見ると、田崎妻が拳銃を拾い、それをまだ囲いの上にいるサトミに向けている。

知道「！」

田崎妻「あんたがいけないの、あんたが……」

田崎妻、引金に指をかける。

都築や警官たち、動けない。

サトミ、恐怖。

知道「だあああああっ！」

警官たちを振り払った知道、サトミに駆け寄り、田崎妻の前に立ちふさがる。

田崎妻、拳銃を知道に向ける。

しかし知道、田崎妻を睨み、サトミをかばって立ち続ける。

田崎妻、発砲。

一同「！」

がく然とする都築や政則たち。

だが、知道は立ったまま。

知道の背後の雑居ビル、別府のすぐ横の窓ガラスに穴が開いている。

別府「お、お……」

虚脱した田崎妻、警官たちに取り押さえられる。

知道、囲いの上からサトミを降ろす。

サトミ、傷だらけの知道を見つめて、

サトミ「お兄さん……」

政則「明穂！」

駆け寄った政則がサトミを抱き締める。

知道、あわてて姿勢を正して、  
知道「(緊張) あ、あの、お義父さん——」

知道、だらしなく倒れて気絶する。

### ○ 同・表(夕方)

大勢の野次馬が集まっている。

駐車場に停まった救急車の横に、林と救急隊員(男)がいる。

救急隊員、引き上げの準備をしながら、

救急隊員「まあ、出番がなくて良かった。あの男の人も、派手に殴られてたけ

ど骨には異常なかったし。無罪放免なの？」

林「(うなづく) ロリコンってだけじゃ逮捕できないしき。課長、活躍に免

じて、公務執行妨害は見逃してやるんだって」

救急隊員「うん。……でも、確かにその手はあるなあ」

林「え？」

救急隊員「あの人、取調べで『大久田の廃工場の場所に、もうすぐ中央病院が

移転してくる』って言ってたんでしょ？」

林「ああ、『だから自分は、病院と間違えてあそこに行ったんだ』って」

救急隊員「俺、市内の地理には詳しいだろうって、中央病院の院長に頼まれて

るんだよ。今の場所が手狭で移転もありうるから、どこかいとこ

ろがあつたら教えてくれないかって。(大きくうなずいて)うん。確かに、

あそこなら申し分ないな」

### ○ 同・事務室(夕方)

騒動の後片付けが行われている。

応接用ソファにいるサトミと政則。

サトミ「あつ、お母さん！」

玄関から入って来た母・由香理(33)、サトミに駆け寄って、

由香理「明穂、大丈夫？ どこも怪我ないの？」

サトミ「うん、平気。あのね、お母さん、(指さして)あのお兄さんが明穂のこ

と助けてくれたんだよ」

少し離れたところで、何やら都築に頭を下げている知道。

眼鏡はなく髪は縛ったままで、顔には大きなガーゼが貼られて  
いる。

サトミ「すごかった。ビューンってジャンプして、バシバシって患者やっつけ

て」

由香理「笑って）うん、さつき、お父さんから電話で聞いた。じゃあ、あの『プリンセス・エミー』に出てくる王子様みたい？」

サトミ「満面の笑み）うん！」

嬉しそうに知道を見ているサトミ。

そのサトミに聞こえないように、

政則「それで、入院の手続き……」

由香理「済んだ」

政則「うん……」

由香理「……」

サトミ「あ、お父さん、エミーのジャンパー忘れた」

政則「えっ？」

サトミはジャンパーを着ていない。

サトミ「さっきの二階のお部屋に忘れて来ちゃった。どうりで寒いと思ったら。

ねえ、早く。取りに行く」

政則「うん」

サトミ「お母さんも」

と、サトミ、由香理に手を差し出すが、

政則「お母さん、ちよつと疲れてるんだ。だから明穂、二人で行こう」

サトミ「そう？　じゃあ、行つて来る」

由香理「うん」

去つて行くサトミと政則。

笑顔で見送つた由香理、力なくソファに腰を下ろす。

暗い表情。

知道「あの……」

見ると、近くに知道が立っている。

由香理「あつ、どうもすみません。今日は、うちの明穂を助けていただいたそ

うで——」

知道「あつ、いえ、それはいいんですけど、その……。言葉を選びながら」

あの、失礼ですけど、今日、病院で心臓の検査をなさったんですよね？」

由香理「（驚き）えっ」

知道「すみません。僕、知ってるんです……。ちよつと、お話してもいいですか？」

### ○ 同・休憩所（夕方）

廊下の奥、休憩所のような場所になった場所に、知道と由香理が二人だけにいる。

由香理「（とまどって）二〇年後……」

知道「やっぱりそうですよね。未来から来たなんて、僕自身も信じられませんから……」

由香理「うん……。あつ、でも、ちよつと信じるかも」

知道「え？」

由香理「（指さして）だって」

知道「ああっ！」

知道の体の周りに、細かな粒子状の光が漂い始めている。

知道「（驚いて）これ、来た時と同じです。昭和理科大学の中歩いてたら、いきなりこの光に包まれて、それで……」

由香理「タイムスリップした？」

知道「（うなずく）」

由香理「じゃあ、今度は元のところに戻るってこと？」

知道「（不安）だといいんですけど……」

粒子状の光、急速に増えて知道を包み、どんどん明るくなってゆく。

由香理「あとそれからね、もう一つの信じる理由」

知道「？」

由香理「明穂、いつもはすごく人見知りするのに、あなたのことは大好きמידだから。——だから私、あなたのことを信じる。帰ったら、あの子のことよろしくね」

知道「（感激して）はい」

さらに増え、まぶしいほどになった光。

その中で、知道の体、足の先から消え始める。

知道「あつ、そうだ——」

と、あわててポケットを探り、

知道「これです。これを渡そうと思ったんです」

体が半分消えつつある知道、由香理に何かを差し出す。

### ○ 同・廊下（夕方）

ジャンパーを着たサトミが政則と歩く。

政則、携帯電話に、

政則「すみません、今日は臨時休業させていただいて……。はい、明日はいつも通りに。ではまた、食パンをサンドイッチ用に——」

電話からガリガリツと音が聞こえ、廊下の奥の方から、

知道の声「ああっ！」

サトミ「あつ、お兄さん!？」

嬉しそうに駆け出すサトミ。

政則の電話は切れている。

政則「？」

### ○ 同・休憩所（夕方）

サトミが走って来る。

休憩所にいたのは由香理だけ。

由香理、（まぶしい光を見たために）目をこすっている。

サトミ「あれ、お母さん？ お兄さんいなかった？」

由香理「うん、今までここにいたんだけど、もう行っちゃった」

サトミ「えっ？ どこ行ったの？」

由香理「多分ね、すごく遠いところ」

サトミ「えー？」

由香理「でも大丈夫。明穂、あのお兄さんとは必ずまた会えるから」

サトミ「本当に？ いつ？」

あとから来た政則、由香理に、

政則「（心配）どうした、こんなところぞ？」

由香理「明穂、初恋かな？」

政則「初恋？」

サトミ、懸命に背伸びし、窓の外に知道を探している。

それを見た政則、あわてて、

政則「おい、まさかあの男？ 駄目だって、あんな男。だって歳が違いすぎるだろ？ それにさ、あんなビルを跳び移るようなムチャクチャなの、

本当は勇気でも何でもないし——」

由香理「（クスッと笑う）」

政則「えっ？」

由香理「ううん、別に」

政則「えっ、何？ 何だよ？」

## ○ 結婚式場・ロビー

白髪頭の政則。

イライラと外を見ていたが、しびれを切らして歩き出す。

すでに大勢の式出席者が集まっているロビー。

その片隅で、テレビ（前出のもの）がついている。

近くで見ると、それは（現在のものとは全く違う）空中投影式の立体テレビ。

ニュース番組のアナウンサーが、

アナウンサー「……逮捕されたのは住所不定無職の宇垣敦容疑者。誘拐された

五人の少女は全員無事に保護されており、宇垣容疑者は容疑を全て認めていたということです。——それでは続いて、昭和理科大学の事故に関する続報です」

テレビの映像、昭和理科大学の構内（冒頭のシーンで知道が歩いていた場所）のものに切り替わる。

警官や白衣の学生たちが行き交い、慌ただしい雰囲気である。

アナウンサーの声「先ほど、昭和理科大学の塚原武雄学長はコメントを発表し、今日午前九時ごろ同大学の構内で、人工ブラックホールの生成実験中に事故が起こったことを認めました。この事故により、周囲の時空間に何らかの歪みが生じた可能性もあるとして……」

## ○ 同・新婦メイク室

ドアを乱暴に開け、政則が入って来る。

政則「（イライラと）おい、何やってるんだ、あのへなちよこメガネは？ もう時間ないぞ。係の人、もう式はリハーサルなしで、ぶっつけ本番にするしかないって——」

目の前に、ウエディングドレス姿の明穂が立っている。

政則、言葉を失って、

政則「……」

諸岡が一礼し、静かに部屋を出て行く。

明穂「……何？」

政則「ああ、いや……。ドレス、そういうのだったのか」

明穂「うん。どう？」

政則「うん」

明穂「そう」

政則「うん」

明穂「……」

政則「……」

明穂「あつ、あれやろうか？ 三つ指ついて（大げさに）『お父さま、長らくお世話になりました』って。あつ、そういえば三つ指ってどの指？ これとこれ？」

政則「いいよ、バカ。……じゃあ、開けるか、母さんの箱」

明穂「うん」

二人、机に置かれた箱のところへ。

明穂「じゃあ、いいよね？」

政則「うなずく」

明穂、箱の紐を解き、「明穂へ」の紙が貼られたフタを開ける。中に入っていたのは、知道が使っていた携帯電話。

明穂「これ、知道の……」

政則「えっ？」

明穂、携帯電話を開くが電源が入らない。接続されていたコードを電源につながると、待受画面に、遊園地で笑う明穂の画像が現れる。

明穂「ほら、やっぱり知道の携帯……」

待受画面に、自動で「ビデオ再生」の文字が表示され、動画の再生が始まる。

夜の部屋に、パジャマ姿でいる由香理（33）の動画である。

（由香理が携帯電話のカメラを使い、自分で撮影したもの）

由香理、カメラに向かって、

由香理「ええと……。明穂、結婚おめでとうございます。今日は二〇一一年一月一日。今朝、一が六つも並ぶ日だって自分で気づいて、明穂は大喜びしていました。今は夜の一〇時。明穂とお父さんはもう寝てます。——ほら」

由香理がカメラを動かし、布団で寝ているサトミ（六歳の明穂）と政則の姿が映し出される。

カメラ、再び由香理を写して、

由香理「今日がどんな日だったか、明穂はきっと覚えてますよね。今日、あの警察署で、私はあなたが結婚する飯倉知道さんと会いました」

驚く明穂、思わず再生を止めて、

明穂「ちよっと、何これ？ お父さんが（箱に）入れたの？」

政則「まさか。お前、あの男にあの警察署のこと話したか？」

明穂「話したでしょ、酔っ払った時にお父さんが二〇回くらい。『あの素晴らしい青年は恐れずにビルを跳び移った。あれこそが本当の勇気だ。いざという時、君はあんなふうに命懸けで明穂のことを守れるのか』って。……でもこれ……どうということ？」

二人、訳が分からない。

明穂、再生を再開させる。

小さな画面の中の由香理が、

由香理「きつとお父さんは、何のかんのと知道さんに文句をつけると思います。でも気にしないで。それ、全部やきもちだから。知道さんとあまり話にはできなかったけど、私には分かります。明穂、あなたの選んだ人間違いはありません。これからの人生、知道さんと二人で元気に歩いて行って下さい。きつと大丈夫。……それから、あなた、お父さん。私、こんなことになってしまつてごめんなさい。この携帯電話は、中に明穂の写真がいっぱい入っているからと言って知道さんがくれました。明穂、いい子に育ったんですね。長い間、本当にお疲れさまでした。ありがとう」

そう言つて由香理、明穂と政則が寝ている方を見る。

優しく穏やかな由香理の横顔。

動画の再生が終わる。

見ていた明穂、あつげに取られて、

明穂「ねえ、これ……」

政則、答えない。

見ると、政則は顔を伏せて肩を震わせている。

明穂「？」

政則は泣いている。

明穂「……」

明穂の目にも涙があふれる。

それをこらえ、上を向いて、

明穂「……お父さん、ありがとう」

声を殺して泣く政則。

電話のような着信音が鳴る。

明穂「涙を拭って」はい」

壁のテレビモニタがつき、式場スタッフが映って、スタッフ「失礼いたします。御新郎様、ただいま御到着なさいました」

### ○ 同・キリスト教式の式場

オルガンの曲が響く。

バージンロードを並んで歩き出す明穂と政則。

大勢の出席者たちが温かく見守る。

歩く政則、祭壇の下で待つ知道を見て、

政則「？」

タキシード姿の知道、眼鏡は掛けずに髪を後ろで縛り、顔には大きなガーゼが貼られている。

政則「どこかで見えたような」……」

首をかしげながら政則、知道に明穂を引き渡す。

祭壇で聖書を朗読する神父。

その前に立つ明穂、隣の知道に小声で、

明穂「あの携帯、どういうこと？」

知道「え？」

明穂「何、その（顔の）怪我？　こんなに遅刻してどこ行ってたの？」

知道「（口）もって）ああ、うん、それが……。ごめんねサトミさん、その……」

明穂「もういい加減にして」

知道「ごめん……」

明穂「私、今日から『里見さん』じゃないんだから」

知道「うん……。 （ハツとして） えっ？」

神父、とがめる咳払いをして、

神父「飯倉知道さん」

知道「あ、はい」

神父「あなたはこの女性、里見明穂さんを妻としようとしています。あなたは、病める時も健やかなる時も、彼女を愛し、敬い、慰め、助け、その命の限り彼女とともに歩むことを誓いますか」

知道、明穂を見つめる。

見つめ返した明穂、うなずく。

知道、真っ直ぐ前を向いて、

知道「はい。誓います」

終